武蔵野幕屋 聖書講筵
「自由論」
――ガラテヤ書第5章――

１９５７年3月24日
小池辰雄

奴隷の軛　霊と信は不可離一体　全開の道　マラソン競争　芥種一粒の信　御霊のみ　自由は
キリストから来る　集会というのは一回限り　霊と肉　霊によって新生　日本人の霊盲を開く
神の意志が我が意志となって入ってくる　霊のリバイバル　己れの義　一切の魂の問題を十字
架にかけた　日本の敗戦　もう天国は私たちの中にある　自由即愛　素晴らしい天則の世界

【ガラテヤ5】

1 キリストは自由を得させん為に我らを釈き放ちたまえり。然れば堅く立ちて再び奴隷の軛に繋がるな。

2 視よ我パウロ汝らに言う、もし割礼を受けば、キリストは汝らに益なし。3 又さらに凡て割礼を受くる人に証す、かれは律法の全体を行うべき負債あり。4 律法に由りて義とせられんと思う汝らは、キリストより離れたり、恩恵より堕ちたり。5 我らは御霊により、信仰によりて希望をいだき、義とせらるることを待てるなり。6 キリスト・イエスに在りては割礼を受くるも割礼を受けぬも益なく、ただ愛に由りてはたらく信仰のみ益あり。7 なんじら前には善く走りたるに、誰が汝らの真理に従うを阻みしか。8 斯る勧は汝らを召したもう者より出づるにあらず。9 少しのパン種は粉の團塊をみな膨れしむ。10 われ汝らに就きては、その聊かも異念を懐かぬことを主によりて信ず。されど汝らを擾す者は、誰にもあれ、審判を受けん。11 兄弟よ、我もし今も割礼を宣べ伝えば、何ぞなお迫害せられんや。もし然せば十字架の顛躓も止みしならん。12 願くは汝らを乱す者どもの自己を不具にせんことを。

13 兄弟よ、汝らの召されたるは自由を与えられん為なり。ただ其の自由を肉に従う機会となさず、反って愛をもて互いに事えよ。14 それ律法の全体は『おのれの如く、なんじの隣りを愛すべし』との一言にて全うせらるるなり。15 心せよ、もし互いに咬み食わば相共に亡されん。

16 我いう、御霊によりて歩め、さらば肉の慾を遂げざるべし。17 肉の望むところは御霊にさからい、御霊の望むところは肉にさからいて互いに相戻ればなり。これ汝らの欲する所をなし得ざらしめん為なり。18 汝等もし御霊に導

かれなば、律法の下にあらじ。19それ肉の行為はあらわなり。即ち淫行・汚穢・好色・20偶像崇拝・呪術・怨恨・紛争・嫉妬・憤恚・徒党・分離・異端。21猜忌・酔酒・宴楽などの如し。我すでに警めたるごとく、今また警む。斯ることを行う者は神の国を嗣ぐことなし。22然れど御霊の果は愛・喜悦・平和、寛容・仁慈・善良、忠信・23柔和・節制なり。斯かるものを禁ずる律法はあらず。24キリスト・イエスに属する者は肉とともに其の情と慾とを十字架につけたり。

25もし我らの御霊に由りて生きなば、御霊に由りて歩むべし。26互いに挑み、互いに妬みて、虚しき誉を求むることを為な。

●奴隷の軛

ガラテヤ書第5章です。

1キリストは自由を得させん為に我らを釈き放ちたまえり。

この「自由」というギリシア語は「エリーテリア」ですが、本来の意味は「釈き放ち。奴隷の軛から解放すること」、即ちそういった「解放」「解き放ち」というような意味です。日本語の自由は、どういう意味だかよく知りませんが。キリストはこの「解き放ち」を与えようというわけで、私たちを解き放ち給うた。ですから、この「解き放ち」という名詞と「自由」という名詞は語源的に同じです。

然れば堅く立ちて再び奴隷の軛に繋がるな。

「だから、再び律法の奴隷となっているようであるが、戒律宗教に少し囚われているようだが、これはとんでもない間違いである」

という。この「奴隷」とはここでは、「律法の奴隷」という意味です。

「そういった律法の元来のユダヤ教から、せっかくキリストが解放してくださったのに、またユダヤ教に戻るか」

というわけで、

「奴隷の軛に繋がるな」

と言った。

2視よ、我パウロ汝らに言う、

と、特にパウロがここで強く言いかけています。

「視よ、我パウロが神にありて誓って言う」

というような気持です。

もし割礼を受けば、キリストは汝らに益なし。

「もし割礼を受けば」とは、今でいうなら、

「洗礼を受けることが救いの条件と思うならば」

あるいは、

「いろいろな制度とか宗教的祭儀とかいったことが義とされる救いの条件というならば」

と、そういった意味で「割礼を受けなば」という。「割礼」というのは、ユダヤ人が昔からアブラハムの時からやっている聖別の徴です。旧約聖書をごらんになるとわかります。

「そういった肉体に与えるところの聖別の徴を受けるということが、信仰生活に一つの不可欠の条件であると思うならば、キリストは汝らに益なし」

と。即ち、

「誡律ということをそこに必要条件とするようなことであるならば、キリストは益なかろう」

という。この「なかろう」とは、想像ではなくて、未来にかけて言ったような意味です。

「これからもキリストはお前たちに対してなんら力をもたないことになるぞ」

という意味です。

教会でも勿論、今、洗礼を受けることが救いの必要条件とは思っていないと思いますけれども。救いの徴として洗礼を受けるというように勿論、考えていると思いますけれども、無教会がそれをただ一途に、

「教会は洗礼を不可欠にしている」

と思い込むことはまた悪いです。よく相手の事情を知らなくてはいけません。

人の「義とされる、救われる」ということにかけては、パウロは絶対に一歩も譲らない。それは「信仰のみ」という。マルチン・ルターもそれで戦った。ただそれからもう一つ、派生的ないろいろな事態として、この教会制度というものも、ある程度やむを得くなく出来上ってきたし、パウロの時にも既にそうです。そういうことに囚(とら)われなければいいので、人間のすることはどれもこれも決して絶対なものではない。どれもこれもみんな相対なものです。そしてみな、破れをもっています。ゆがみをもっています。これが本当に全き姿になるのは神の国がきた時で、それまではダメなのです。けれども問題は、

「内側に本ものを受けとっているか」

というところにあるのでして、即ち、そういった第二義的なものの奴隷となっているかどうか、それに囚われているかどうか、魂が本当にそれから解放させられているかどうか、ということにある。

「それが観念でなくて事実であるかどうか」

ここに問題がかかってくる。そういう一番の根本問題に対して、何か別な必要条件を少しでも持ってくるなら、それはいかん。その点でパウロは一歩も譲らないという角度です。

[3]**又さらに凡て割礼を受くる人に証(あかし)す、かれは律法の全体を行うべき負債(おいめ)あり。**

もしも割礼を受けることが救いに大事であると思う人があるならば、即ち、ユダヤ教的な角度で「割礼を受ける」という人には言うけれども、それならば律法の全体を行うべき義務がある。一つではダメだ。律法の中のある一つのことを為すんだと取りかかってくるならば、律法の全体――割礼はまだ律法の中のごく一部分であって、大事なことはモーセの十誡にあるところの律法です――これを全部完全に行う義務がある。それなら割礼を受けてもさしつかえない。“all or nothing”とか、“alles oder nichts”（全か無か）であって、全然律法の下にないか、あるいは律法の下に来るというならば律法をすっかり全うするか、どちらかだというわけです。

4 **律法に由りて義とせられんと思う汝らは、**

即ち、律法を実行して自らを義とされようとする汝らは――既に私は本当の福音を二度も伝えて来たのに、なおエルサレム本山の伝統的ユダヤ教が、「十字架＋α（アルファ）」「十字架＋律法」というようなクリスチャンが「律法によりて義とせられん」という角度を、またより戻してしまったから――

キリストより離れたり、

と。実は、「キリスト＋α」は、かえってキリストから離れている。キリストというなら、キリストだけなんだと。

恩恵（めぐみ）より堕（お）ちたり。

と。それはキリストの恩恵から離れ、キリストより離れ、恩恵より堕ちた。キリスト即ち恩恵です。

どうか皆さん、この聖書の言葉を観念的につかまえないように。「恩恵」といったらば、その内容はキリストですよ。「義」といったらば内容はキリストです。私は何も方程式を作るのではないけれども、必ず何か心的事態にぶつかったら、そこには必ず具体的にキリストにぶつからなければダメです。

キリストより離れたり、

と。またパウロはもういっぺん、

恩恵（めぐみ）より堕（お）ちたり。

と言わざるを得なかった。バラバラに考えないで、どこまでも生命体として有機的につかまえていくことです。

●**霊と信は不可離一体**

5 **我らは御霊（みたま）により、信仰によりて希望（のぞみ）をいだき、義とせらるることを待てるなり。**

この訳がちょっと弱い。

「我らは御霊によって、信仰によって義の希望を待っているからである」

と、「義の希望」と訳した方がいい。そこのところはそう訳さないと、何か少し力がボケてしまう。

「我らは御霊により、信仰により義の希望（のぞみ）を待っている」

パウロはここでまた、「御霊により信仰により」と言いました。ここのギリシャ語原文を見ますと、単に三格を使っていて日本語の「により」に当たる字は別にない。ギリシャ語では三格を使ってよく「において」とか「により」という表わし方をします。

「聖霊にあって、また信仰において、義の希望というものを待っている」

と。「御霊により信仰により」が三格でもって並行して結びつけられて、しかもこれは定冠詞も何もついていない。非常にここのところは表現が密接なんです、「御霊により信仰により」という言い方が。

「御霊および信仰にあって」

といってもいいと私は思うくらいです。

即ち、霊と信とは不可離一体であります。ギリシャ語では「みたま」の「み」「御」なんていう字はない。ただ「霊」という字です。訳す時に、この場合勿論、聖霊のことですから「御霊」と訳した。「義の希望を持っている」というところは、あとから申します。

6 **キリスト・イエスに在りては、割礼を受くるも割礼を受けぬも益なく、**

非常にハッキリしている。この当時、パウロがこんなことを言うことは、本当に革命的な言葉なんです。私たちが、この御霊のことを強調して、いろいろなことを言われているものだから、パウロがその当時にいろいろと曲解されたり、迫害されたり、異端の首（かしら）とまで言われた気持がいよいよよくわかるわけです。

「主イエス・キリストに在っては」という、この「に在る」は正にパウロがよく使う「エン・クリスト」という形で――間に「ガル」（そは）が入っているので、

「そは、キリストに在っては……」

という――「キリストに在っては、彼に在っては」という言い方が164回あるという。「キリストに在っては」「御霊に在っては」「信仰に在っては」、これはみんな同じことです。

割礼を受くるも割礼を受けぬも益なく、

受けても別にそれで益があるというわけではない。受けなくてもそれで益があるというわけでもない。

「割礼を受けないから、洗礼を受けないから、こっちは純粋だ」

なんて、「洗礼を受けないから純粋だ」と、そういったような言い方を、考え方をうっかりすると無教会がやる。それはいかん。そういったことは、本質問題には関わりない。本質問題は、ドイツ人だろうと日本人だろうと朝鮮の人であろうとみな、人であるならば同じく恩恵に与（あずか）るというのと同じことで、文化の程度がどうである、学問の程度がどうである、という何か条件がつくならば、何かの条件を必要とするならば、最高の貴いものではない。

最高に貴いものは、無条件、絶対無条件のものです。絶対無条件に得られるものが最高に貴い。

●全開の道

いつも申し上げている通り、空気はどこにいる人でも、牢屋の中でも、空気は――牢屋の中では陽は閉ざされているかもしれないが――空気は絶対無条件に吸っている。我々の生命にとって空気というものは最も貴い。空気という「気」という字は「風」であって、これはヘブライ語でもギリシヤ語でも「霊」と通ずる字で、非常に面白い。呼吸の世界です。この「気」の世界。

肉体は空気を呼吸するが、魂はこのキリストの霊、御霊にある霊を呼吸する。そこがもう一番貴い、一番大事な世界です。これからズレていて、福音なんて言ったってしょうがない。肉体の生命の方はこの空気でよくみんなわかるのだけれども、肉体の奥につかさどっているところの、見えない世界だが、一番具体的な霊の世界があって、この霊の気というものを誰でも彼でも吸っている。神様を否(なみ)して、

「神なんかいない」

と言っている連中でも、みんな吸っている。その恩恵は一視同仁にやってきている。

みんな吸っているんだけれども、その吸い方が非常にかすかである。恩恵の受け方が非常にかすかである。窓をほんのちょっと開けているような具合でして、全開していない。私たちは要するに、これを全開するという全開の道なんですよ。全く開く道なんです。解き放ちもそうなんです。全く開く道です。閉ざされている世界から解放する世界。

さっきも言った通り、自由というのは解放する世界、全開する世界です。魂が全開してないものだから、正直どれも本ものでないものですから、どうも苦しい。どうもおかしい。いろいろです。もう事実が証明するから仕方がない。本当に全開している角度の人は、どんな事態にあっても大丈夫なのです。全開していれば、病気も全快しますよ、これはちょっとシャレみたいですがね。

割礼を受くるも受けないも、そんなことじゃないと。「キリストに在る」というならば、本当に全開してキリストを自分の中に迎えることが「在る」ですから、迎えないで「在る」と言ったって、それは思い込みで仕方がない。

ただ愛に由りてはたらく信仰のみ益あり。

愛によりて働く信仰のみ益あり。この５節、６節は大事なところです。「愛を通してはたらくところの信仰」という。

「汝ら、割礼を受けるか受けないかというようなことよりも、大事なことは、信仰の質が愛と離れないような信仰だ」

というわけです。これはまた、ヤコブ書第2章のところと相連関してきます。

●マラソン競争

7 **なんじら前には善く走りたるに、誰が汝らの真理に従うを阻みしか。**

お前たちは前には善く私と一緒に走ってくれたのにと。パウロはよく信仰生活を競争のことに譬えて言いますね。

「**褒美を求めてひた走りに走る人に似たり**」

「**我、既に得たりと言うにあらず、之を追求して止まないんだ**」

という。私たちも、信仰の世界には「これでいい」なんてことは絶対にないということを申し上げておきます。

「信仰によって義とされた、十字架によって救われた、オイシマイ」と、こう下手するとプロテスタントは思いがちです。それはダメです。それは救いの先ず前段階で、救いというものは限りなく展開して、我々がキリストの像に化した時に初めてゴールインであって、それまでは本当のゴールインではない。だから、限りなく進んで、主義主張、立場なんてものはありませんよと。自分で主義主張、立場なんて作ったら、そこで足踏みしてしまう。いつも自分を乗り越えて、抜けて、進んでいかなければ。そこに解き放ちの魂がある。

なんじら前には善く走りたるに

と。この「走り」はもうひとつ私たちがハッキリこのパウロの気持をつかまえて言い表わそうとするならば、マラソン競争です。マラソン競争は、谷あり坂ありいろいろ紆余曲折がある道をうまずたゆまず走って行く。信仰生活はマラソン競争です。短距離走みたく、パアッと走ってそれから休んでしまうのではない。もう信仰生活に限らない。すべてマラソン競争の精神で行く人が人生の勝利者です。学校の成績でもそうでしょ。一夜漬けなんて決していいことはない。毎日やる人が勝つ。

「語学は、先生、どうやって勉強するのですか?」

ときかれて、秘訣も何もありはしない。毎日、本を開いて読む。5分でも10分でも読んで、これに慣れること、習慣となること。忘れるか、忘れないか、そんなことは頓着いらない。とにかく、読んでその時に真剣にその中に入ると、これをやっていれば知らない間に出来てしまう。ちっとも難しくない。一番、語学くらい勉強にならない勉強はないといっていい。問題はただ毎日、マラソン競争のようにやるかどうかということだけ。そして、読んでそれが始めは解ると、大抵はみんなその意味が解ると伏せてしまう。だからいかん。意味が解ったら必ず読みかえす。そしてもう訳をつけないで――ドイツ語でも英語でもなんでもいい――その意味の解釈をしないで、スウーッとその気持が受けとられて、ちょうど私たちが日本語をしゃべったり聞いたりするのに、何も「さてどうだ」なんて二段構えにしてやしない。直接に入ってくるでしょ。直聞直解しているわけでしょ。直聞直解、直読直解というような角度になってきたら、必ず身についてくる。それだけの話ですよ。一日、二、

三行で結構です。そのうちにだんだん加速度がついて来ますから。始めは二、三行が、五、六行が、十行が、一頁が、何頁ということになっていく。マラソン競争で、うまず、たゆまず、毎日マラソン競争をして行く。

●芥種一粒の信

誰が汝らの真理に従うを阻みしか。

パウロは勿論知っているけれども、疑問の形でこう言ったわけです。

8 **斯る勧は汝らを召したもう者より出づるにあらず。**

この「勧め」という字は、「口説き落とし」というような字です。こういった口説き落としはお前たちを召し給うたキリスト、御霊から出ているものではないと。

9 **少しのパン種は粉の團塊をみな膨れしむ。**

「天国はパン種の如し」とキリストが言われたように、パン種が入れば、それで膨らまっていく。一人、本ものがいれば、その周囲がその本ものでだんだん化せられていく。伝道とは、皆さん一人びとりが本ものとなることです。私たち一人ひとりが本ものとなる。キリストの本ものとなったら、日本中がウソッパチであっても、絶対に退かない。単なる確信でないですからね。どうか、一人ひとりが本当にそうなったら、そのような人の集まりというものは驚くべき力なのです。

今は原子力の時代だけれども、みんな一人ひとりがキリストの原始力を――始めの方の、キリストの方の原始力を――忘れて、ただ物理的原子力だけでやっているからダメなんだ。私たちの魂はこのキリストの原始力をもつ。即ち、

「芥種一粒の如き信仰」

というとき、キリストは、

「汝ら一人ひとりが芥種という信仰体になれ」

ということですよ。この小さな芥種一粒という信仰体になりなさいと。

「芥種一粒の信仰であればというのは、どれくらいの分量ですか？」

と考えているから困る。私たちの一人ひとりが芥種一粒。これは誤魔化しの効かない、本ものの芥種だよ。

「一粒の芥種という信仰となりなさい」

と。「信仰を持て」というと、何か対象化するからいかん。

「そういった信仰となれ、そういった信仰体となれ！　そうしたらば、大きな樹となって、花が咲き鳥が宿るぞ。私たち一人ひとりがこの原始力となりなさい」

と。物理の世界ですら、あんな素晴らしいエネルギーがある。私たちのこの五体にあるところのエネルギーが全部百％に発動したならば、これは地球がひっくりかえってしまう程のエネルギーがあるそうですね、人間一人の中に宿っているこの原子力エネルギーという

のは。私たち一人ひとりがキリストの原始力を受けとったら、本当にアトラスのように地球を支えてしまう。これは私たちがするのではない。キリストの力がなし給う。

そういうことですから、

「割礼を受けるも受けないも、そんなことは問題ではない」

と、パウロが言わざるを得ないわけです。なんにも極端を言っているのではない。事実ありのままをパウロは言っている。

8 **斯る勧は汝らを召したもう者より出づるにあらず。9 少しのパン種は粉の團塊をみな膨れしむ。**

善きパン種も悪しきパン種もどっちも膨らまっていくから、この世的なものになったらそいつはダメになるし、この神のスペルマを、キリストのスペルマを、キリストの種を、霊核を宿したならば、そいつは本当に展開していく。

10 **われ汝らに就きては、その聊かも異念を懐かぬことを主によりて信ず。**

「その聊かも異念を懐かぬ」というのは、

「いささかもお前たちが私とは違った気持をいだかない者であるということを——本来はですね——それを主にあって実は信じているんだよ」

と。この「信じているよ」という字は、普通の「信仰」の信の字とは違う。「説き伏せられている、自分はそのように合点している」という意味です。

されど汝らを擾す者は、誰にもあれ、審判を受けん。

だから、本当はその人たちは審判を受ける。

11 **兄弟よ、我もし今も割礼を宣べ伝えば、何ぞなお迫害せられんや。**

使徒行伝の16章を見れば、パウロはテモテに割礼を施している。時によってそういうこともしましたが、しかし、パウロは勿論、それはパウロの本当の気持ではなくて、相手の弱きに従ってしたことなんでしょう。周囲の人を躓かせないために。けれども、その考慮はもうパウロにとっては、今は要らなくなっている。

我もし今も割礼を宣伝えていれば、

福音は言ったけれども、それで十字架・復活は言ったが、ちょっと割礼もそれにつけ加えていれば、エルサレム本山の方と相当、妥協の線にいくから、そうすれば別に迫害せられないですんだけれども、ハッキリ

「割礼は要らん！　そんなものはあってもなくても救いには関係ない」

と言った。即ち本質的には要らない。割礼を受けることが何も悪いとは言わない。そういうことが「いい、わるい」といって、それを問題にしたらば、それはそのことにとらわれているのであって、ちょっとおかしい。けれども、パウロは福音の本質にかけては、それはもう問題でないという意味です。むしろ割礼をすることが躓きになるから、それにとらわれることになるから、むしろ「要らん！」とハッキリ言った。そうしたらば、迫害された。

こういうわけです。

もし然せば十字架の顛躓（つまずき）も止みしならん。

即ち、「十字架のみ」と自分は言っているものだから、それでそんな躓いているんだが、割礼をそれにつけ加えておけば、律法の世界も少しは入れておけば、

「それも結構だ。パウロもよくわかっている」

なんて言われるところなんだけれどね。

●御霊のみ

私たちは勿論、「信仰」なんです。けれども、信仰の事態には、さっき言った

「御霊にありて、信仰にありて」

というこの「御霊」という事態が非常におろそかになっている。それで一体、

「信仰なんていうことが、さて果たして、キリストが、預言者たちが、使徒たちが言っている信仰の事態と同じであるか？」

というときに、

「そうではない！」

と私たちは言う。だから、

「それはいかん」

というような調子でもって一線を引かれる、

「信仰だけだ」

と言ってね。私たちも「信仰だけ」なんです。しかしその「信仰だけ」が、「信仰だけ」の内容が本ものである時には、この御霊の事態と離すことが出来ない。「信のみ」と、「霊のみ」と言っても同じことなんです。「霊のみ、御霊のみ」と言っていい。本当にハッキリ言えば、「御霊のみ」なんです。

いいですか。人間の側の「信仰」なんて言って、サムシングに考えている世界ではないんだから。「御霊のみ、恩寵のみ」なんです。

「恩寵によって、信仰によって」

とパウロはエペソ書の中で言っている。恩寵の方をむしろ先にしている。

「恩恵（めぐみ）より恩恵へ」

という。ヨハネも、

「真理と恩恵」

と言っている。「キリストの義」と言っている。

パウロも「十字架のみ」というわけでありますが、しかしながら、パウロが「十字架のみ」と言っているからといって、

「それでは、パウロは復活の力はどうしたんですか？」

と、そういう質問をしてはダメですよ。「十字架のみ」ということは、パウロにとっては、復活と聖霊がちゃんと入っている事態なんです。ちゃんと奥に響いている。奥に響いていないような「十字架のみ」なんて十字架ではないんですから。

キリストの十字架は、事実がキリストの十字架で終っていますか？　キリストの十字架は確かに肝腎かなめです。肝腎要がなぜ、肝腎かなめであり得るかということは、復活の生命が来ているからです。

「復活の生命が来ていない十字架だったら、肝腎要の十字架が何の十字架ぞや！」というになるのです、こんどは。

何故、キリストの十字架が愛であるか。このことはもう少し後でやります。一まず先へ進みましょう。

●自由はキリストから来る

13 **兄弟よ、汝らの召されたるは自由を与えられん為なり。**

解き放ちが与えられる為でありまして、

ただ其の自由を肉に従う機会となさず、反って愛をもて互いに事えよ。

まぁ、パウロも少し調子を落としてということもないんだが、大事な言い方なんです。「愛をもて互いに事えよ」と。「自由を肉に従う機会となさず」とありますが、自由が本当の自由ならば、肉に従う機会とはならない。けれども、いわゆるこの「解き放ち」が、「ああ、解き放たれた！　私たちは」といって、今度はその解き放ちを私するから肉に従うんです。「反って愛をもて」即ちここのところは、自由と愛とが同じことばに出てくるところに注目しなければなりません。

14 **それ律法の全体は『おのれの如く、なんじの隣りを愛すべし』との一言にて全うせらるるなり。** 15 **心せよ、もし互いに咬み食わば相共に亡されん。**

「互いに咬み食う」ということはどうして起こってくるかというと、自由を私する世界では互いに咬みくらうんです。

皆さんはもし、全開していらっしゃらない方があるならば、今日この集会で全開していただかなくては。私はそれを念願し悲願しながら、それをお話しする。ここに「自由論」なんて題に書いたけれども、論でもなんでもない。こんな「論」なんて言葉にとらわれないでください。私はここで論議したりなんかしているのではないから。この題を書くとき、自由とまず書いて、よっぽど論の字を止めようかと思ったんですが、ちょっと空間があったから入れただけの話です。

とにかく、論議が好きですね。しかし、福音の世界は論議ではない。論議でもって事を決めたって、それはそれだけの話です。今の知識人は何か論でもってことを決めて

「神は在りや無しや？」

なんてやっている。「神がある」と結論したってどうにもならんし、「ない」と結論したってどうにもならん。結論の世界ではない。

マルチン・ルターは『クリスチャンの自由』という本を書いた。けれども、私は特に今日ここに「キリスト者の自由」と書かなかった。ただ「自由」と書いた。ルターも「キリスト者の」と書いてくれなければよかった。ただ「自由について」と書いてくれたらよかった。そうしたら、

「さぁ、自由とは何だろうか？」

とみんなが読む。

「あ、クリスチャンの自由か、そいつは私たちには関係ない」

と。それでこの本を読まない。これが『自由について』と書いたら、

「さぁ、ルターは自由について何と言ったろうか？」

と読まれると、キリストにつかまえられてしまう。ちょっとルターは戦法を間違えたですよ（笑）。ただ「自由」でいい。それが本当の人間の自由、人間に与えられる自由だ。クリスチャンだけに与えられる自由ではないから。

「自由はキリストから来るよ」

という意味なんです、クリスチャンの自由というのは。キリストから来る自由なんです。だから、「キリストからの自由」とか、「神の自由」なんて言わないで、「自由」と言えばいい。

「自由とは何ぞや」といって、どうしてもそこでぶつかって、そこで引っくり返されるということが一番本ものなんです。

●集会というのは一回限り

「この次の日曜もまた集会があるから」

と思ったら、皆さんダメですよ。集会というのは、一回限りです。そんな気持で聴いているなら、私は集会を止めます。

「一回限りで、ここで生命を得なければ、私は（死すとも帰らない）！」

という気持で、この一回限りでもって、この集会に臨んで来なかったら、武蔵野幕屋の集会なんてものは意味をなさない。一回毎に解散です。

内村先生が「一日一生」と言ったけれども、私は「本日一生」です。今日この日が一生なんであって、観念的にただ一日が一生なんて言っているのではない。勿論、内村先生は観念的に仰ったのではないでしょうけれども、響きがそうなる。いいですか。本日一生です。

「本日一回のこの集会で、ここでキリストにつかまえられた自由というものに入らなかったら、私はここを帰るわけにはいかない！」

という、そういった気持で、体当たりです。

イザヤ書の61章を見ますと、イザヤが預言している。

「1**主エホバの霊(みたま)われに臨めり　こはエホバわれに膏(あぶら)をそそぎて貧しきものに福音をのべ伝うることをゆだね**」

「貧しきもの」という言葉をみんな間違えては困る。ただ貧乏だということではない。本当に霊肉の低き者、心の砕けた者、ひくき人、これを「貧しきもの」という。

「霊の貧しき者は幸福なり、天国はその人のものなり」

とキリストが山上の垂訓で、福音の最初に言われた。このことはこの間、「曠野の愛」誌〔「霊の貧者」、第25号１９５６年夏号〕に書きましたね――それから一向、私は書かない。もうあれでたくさんだから。まぁそういうわけでもないですけれども――「霊の貧しき者」という、あそこがつかまえられたら、山上の福音は全部つかまえられる。今日はこの「自由」がつかまえられたら、パウロの書簡全部わかるといってもいい。

「1**主エホバの霊(みたま)われに臨めり　こはエホバわれに膏(あぶら)をそそぎて**

聖霊の膏をそそいで、霊肉の砕けたひくき者に、

貧しきものに福音をのべ伝うることをゆだね、我をつかわして心の傷(いた)める者をいやし俘囚(とらわれびと)にゆるしをつげ　縛(いまし)められたるものに解放(ときはなち)をつげ

この「解放(ときはなち)」が自由という字です。ヘブライ語にはこの解放、自由という字に三つか四つありますけれども。

2エホバのめぐみの年とわれらの神の刑罰の日とを告げしめ　又すべて哀(かなし)むものをなぐさめ　3灰にかえ冠(かんむり)をたまいてシオンの中のかなしむ者にあたえ悲哀(かなしみ)にかえて歓喜(よろこび)のあぶらを予(あた)え　うれいの心にかえて讃美の衣をあたえしめたもうなり　かれらは義の樹　エホバの植えたもう者　その栄光をあらわす者となえられん」（イザヤ61・1～3）

このイザヤ書61章の1節から3節までででもう、パウロの福音と相照応しているから、イザヤ書というのは素晴らしい。「解放(ときはなち)」が如何に驚くべき内容をそこに盛る事態であるかということが、このイザヤ書61章でもわかります。それはどこから来ているかというと、

「エホバの霊(みたま)われに臨めり」

と、ここから来ている。聖霊の事態なくして自由なんて言ったって、これはダメなんです。

●霊と肉

パウロはこのガラテヤ書第5章16節に、

16我いう、御霊によりて歩め、さらば肉の慾を遂げざるべし。17肉の望むところは御霊にさからい、御霊の望むところは肉にさからいて互いに相戻(もと)ればなり。

パウロがここで「肉」というのは、単なる肉情の肉ではない。これはみな、「我」というものを肯定していく立場、これを「肉」という。自己を立てていく立場、それがどんなに

崇高な内容であっても、立派な内容であっても、自分というものが立っているところを「肉」という。

「霊」というのは、神の意志を立てる世界を「霊」という。神の意志を、聖なる意志を立てる世界を霊という。聖意の成っていく世界が霊である。自我、自己の成っていく世界を肉という。

これ汝らの欲する所をなし得ざらしめん為なり。18**汝等もし御霊に導かれなば、律法の下にあらじ。**

御霊に、神の意志に導かれたらば、御霊によって神の意志に導かれたならば、これは律法の下にはない。「律法の下にはない」ではなくて、本当は深く律法と一つなんですよ。律法の下にないとは、律法というものを何か対象にして、それに縛られていくという事態ではなくなるというのですから。

19**それ肉の行為はあらわなり。**

肉の「行為」という字は「業」という字で、複数で書いてある。肉の自己本位の行為というものは、業というものは露であって、

即ち淫行・汚穢・好色

これは性的なものですね。それから、

20**偶像崇拝・呪術**

これは御利益宗教式な間違った宗教、

怨恨・紛争・嫉妬・憤恚・徒党・分離・異端。21**猜忌・**

まぁ「異端」はちょっと違いますけれども、そこまでが人間との関係で、みんなそこで自己というものが立っているから、そういった嫌らしいものがたくさん出てくる。これはみんな肉です。そして、

酔酒・宴楽

これはやはり肉体的な食欲の方。

などの如し。我すでに警めたるごとく、今また警む。斯ることを行う者は神の国を嗣ぐことなし。

こういったものを「行う」という字は、いまの字と少し違う字で、これは「常にそれを習慣のようにやっている」者という。これは神の国を嗣ぐことは出来ない。人間だから時々、犯したりなんかしますけれども。しかし、それがもう習慣となって、習性的になって来たらもう絶対、神の国に入れない。

22**然れど御霊の果は**

御霊の「果」という字は「カルポス」という字で、これは単数です。御霊がもたらすところのものは、

愛

一番先に愛です。

喜悦（よろこび）・平和

これが一段。大体、神との関係がそこに先に立っている。愛、喜悦、平和です。

寛容・仁慈（なさけ）・善良、忠信・[23]**柔和・**

これは人との幸福な関係。さっきのとちょうど反対です。

節制なり。

それはさっきの「淫行・汚穢（けがれ）・好色」と、それから「酔酒・宴楽」という、こういったものに対する。「節制」と、一語で言ったと考えていいでしょう。自己の在り方ですね。対神、対人、対自。神に対する、人に対する、己れに対すると、ちゃんとそのような具合に出来ている。これが即ち「御霊の果」です。

斯（か）かるものを禁ずる律法はあらず。

勿論ない。

[24]**キリスト・イエスに属する者は、肉とともに其の情と慾とを十字架につけたり。**

「情」は外側から受けて、それに動かされる角度が情です。それから「慾」は、こっちから発して動いていく角度。即ち、受動的と能動的な気持で言っているわけです、この「情と慾」というのは。大体、質は同じですけれども、慾の方がなお悪い。

[25]**もし我らの御霊に由りて生きなば、御霊に由りて歩むべし。**[26]**互いに挑（いど）み、互いに妬（ねた）みて、虚（むな）しき誉（ほまれ）を求むることを為（す）な。**

「御霊に由りて生きなば、御霊に由りて歩むべし」の、「歩むべし」というのは、「歩もうじゃないか」ということ。

●霊によって新生

それでまぁ一通りいきましたが、パウロが自由をここで強調しているその事態において、「御霊」ということが非常に前面に出ている。5節に、

「我らは御霊（みたま）により、信仰によりて」

とあり、それから16節に、

「御霊によりて歩め」

と言い、25節に、

「我ら御霊に由りて生きなば、御霊に由りて歩むべし」

とある。私たちが普通、自由というと、自分が何にも拘束されない、勝手にすることが自由ですね。

「ああ、今日は学校がなくて、学校に縛られないで自由でいい」

なんてね。これは自然の感情です。ドイツ語で“Lust（ルスト）”「楽しみ、欲求」というわ

けです。

「[24]**キリスト・イエスに属する者は、肉とともに其の情と慾とを十字架につけたり**」

とありましたが、実際、「慾」という字は「欲する心」という字でしょ。「欲する心」はドイツ語では“Wollen（ヴォレン）”、英語でいうと“will”ですか、「意志」という字、「意志する、欲する」こと。要するに、「聖意」の「意」の字です。意志すること。

問題は、この意志する世界にある。欲する世界です、自由というのは。自由というのは、私たちがやりたいことが出来るのが、いわゆる常識的にいう「自由」というんでしょ。何かに拘束されないで、解き放たれている。解き放たれてやりたいことが出来るという。自己の意志が、自己の欲するところが、出来ることが即ち自由という。

「**風はその思うところに従って吹く**」

という。「風はその思うところに従って」というのは、風はその欲するところに従って吹いている。新たに生まれる人もまた、

「**霊によって新たに生まれる人も斯くの如し**」

とキリストが言われた。霊によって生まれる人は、そのような欲するがままに動くようなことなんだ、それが即ち霊によりて新生すること。即ち霊によりて生まれることが、キリストがあのヨハネ伝の3章で言ってらっしゃるように、これが即ち――あそこに自由という言葉がないけれども――自由なんです。霊によりて生まれて動いている。

キリストという人を、皆さん、見てください。福音書を見て、キリストの姿は何ですか。一つの答えとして、やっぱりこれは自由である。誠に自由人である。けれども、キリストは欲するところに従って動いているけれども、キリストのこの「欲する」という、このキリストの自由は神様の意志、「神の欲する」ところを「我が欲する」ところとして動いている。神様の欲するところを、我が欲するところとして動いている。これが自由なんです。神の欲するところを我が欲するところとして動いている。

ところが、普通、私たちの自由というのは、我が欲するところによって動くことを自由だとしている。ここに自由が、同じ自由という言葉を使っても、根本的に天地霄壌（しょうじょう）の差があるわけです。だから、キリストの生涯は、

「汝の聖意（みこころ）を成してください。この私を通してあなたの聖意が成ってください」

と。即ち、キリストは神の自由を求めている。神様が欲して、

「このキリストは少し抵抗がある男だな」

とはお思いにならないで、

「ああ、このキリストという男は、実に自由に使えるなぁ！　私が欲するがままに実によく動くなぁ」

と。キリストは実は、神の自由を求めていた。

「汝の聖意を成させ給え」

とは、

「汝の自由をして働かしめ給え」

ということです。

「貴神（あなた）の欲するがままになし給え。貴神の自由をして働かしめ給え。私は貴神に対しては自分の自由を捨てます。私は奴隷となります。」

と。だから、マルチン・ルターが『不自由について』という本を書いている。これは実は自由論なのです。本当の自由論です。今日はこれをご紹介するわけにはまだ参りませんけれども、いずれよく読んでから、ご紹介したいと思います。

●日本人の霊盲を開く

キリストは神の自由を求めた。キリストが私たちに与えた福音というものは即ち、神の自由を与えた世界なんです。けれども、神の自由を手放しに与えるわけにはいかなかった。キリストは勿論それをなさりたかったでありましょうけれども、自分と同じように手放しに。けれども、手放しに出来ない。人間は、神の自由を直接に受けるわけにいかない。そこで、仕方がない。キリストは神の自由を完全に身に体し、彼自身が自由人であり、自由体である。

「自由体を、神の自由人の、その全生命を、この自由生命を、解き放たれたる生命を、私をお前たちにやる」

これが福音です。福音は即ち、

「解き放たれたる自由をお前たちにやる」

ということ。近代人が一番欲しているもの、今の青年が一番欲しているものは、自由でしょ。そして、相当勝手にやっている。人を人とも思わないような調子です。

学校へ行ったって、担任のクラスの生徒ぐらいは挨拶もするでしょうが――なにも私は挨拶をされたいから言うのではないけれども――「あそこに何が歩いているか」くらいのところでなにも考えやしない。それくらいに今の青年という者は、学校の中でも先生の存在なんか無視して、傍若無先生でありまして、そういったところが自由のように考えている。たとえ習っていない先生でも、それが大学の自分の学校の先生というならば――何も大勢いるところで挨拶することはないですよ――二、三人歩いているような時には、ちょっと会釈したらいいでしょう。それの方が人格の潤いがある。私たちには、どういうもんだかかわからない。私たちが大学にいた時には、先生がくれば自然にお辞儀をしたものですが。これは封建〔主義〕でもなんでもない。交わりの美（うるわ）しい人格の現われであろう。ところが何かガサガサしている。

そういったところに、自由というものをはき違えている。それはみんな私されて、自分が勝手気ままであることが自由であり、それが大いに新しい道徳であるかの如くになって

いる。正直なところ、日本人の魂を見ていると、私たちはその将来に対して決して楽観的な気持を持てない。

私の母は35年間、失明して死にました〔１９５７年1月19日、88歳〕。私はこの間、はっきりその意味を知った。即ち、

「汝、何を見るや？」

「35年間、盲人であった母の屍を見る」

と。そのあとから、

「私は日本人の霊盲を見る」

そう神様にお答えした。日本人の霊的盲(めしい)を開くことが――私は何人開けるか知らないけれども――日本人の霊盲を開くことが私の使命であります。母はその生涯をもって、私にこれを課題として、逝ったのです。この霊盲を開かなくては、私は只で死ぬわけにはいかない。

人間の自由としたら、これは反って不自由になる。自分の意志を為(し)たら、これは必ず不自由になって咬(か)みつき合うと、パウロがここで猛獣の事態をもって言っている。互いに咬み合いになる。自由を言っていたらば、徒党、嫉妬、そねみ、いろんな悪いことが来まして、咬み合いの世界です。ところが、マルチン・ルターが、パウロが、キリストの自由、神の自由ということを言っているのを、人はそれを人間の自由に切り換えてしまった、知らない間に。そうして、傍若無神であり、傍若無人である。そうなったら、これは咬みつきの世界になりますから、亡びる。

人間は、「何々すべし、何々すべからず」なんてことで動けるものではない。相対的には、「すべし、すべからず」でも動きますよ。けれども、本当の意味において「すべし、すべからず」は私たちの生命にはならない。私たちは小さい時から孔子の道徳で、

「何々すべし、何々であれ、何々をするなかれ」

と、散々教わってきた。けれども、やはりパウロがここで言った通り、

「律法は教えるけれども、力を与えない」

と言っているじゃないですか。ガラテヤ書の他のところですよ。即ち、教えて、こういう事態であるということを言っても、力は与えない。人間に一体、力を与えるものは何かということです。

●神の意志が我が意志となって入ってくる

モーセの律法の精神は、新しい方がいらっしゃるからもういっぺん言っておきますけれども、

「汝、わが面(かお)の前に何ものをも神とすべからず」

「偶像を彫(きざ)むべからず」

「安息日を守るべし」

「わが名を妄(みだ)りにあぐべからず」
「父母(ちちはは)を敬うべし」
「殺す勿れ」
「姦淫するなかれ」
「盗むなかれ」
「偽(いつわ)るなかれ、偽証を立つる勿れ」
「隣人(となりびと)をむさぼるなかれ」

という。「べし、べからず」でもってモーセの十誡はきて、ドイツ語も日本語もみんなそのように訳してある。けれども、十誡の根本精神はそうではない。

「汝、他の神々を拝することなし」
「安息日を守る」
「父母を敬う」
「姦淫することなし」
「盗むことなし」
「偽ることなし」

と。みなこれは現実断定です。神様は私たちを信頼してかかって、ユダヤ人に、

「お前たちは、大丈夫、私が神だから出来るぞ。私を本当に神としているなら、お前たちのその現実は、つっ走ることが出来るんだぞ」

という、驚くべき、人間に対する、イスラエルに対する信頼をもって来てかかっている。けれども、この信頼をもってかかってくる神の言葉を受けとりそこなって、「べし、べからず」の方になってしまった。勿論、人間ですから、「べし、べからず」ということも、その信頼の言葉の奥から、いましめとしては出てくるでしょう。けれども、それは本当は第一義的ではなかった。私はそう思う、どの註解書にそういうことが書いてあるか知らんけれども。そういう「べし、べからず」でなくて、「そうである」と言って、相手を信頼してかかってきたらば、自分がそうでない時に、

「ああ、神様はそんなに信頼してくださったか、私は悪かった」

と、神の信が私たちを悔い改めに導く。「すべし、すべからず」は私たちを悔い改めに導かない。神の信とは、私たちを斯くまでも愛するところの、神の愛である。相手が資格のない駄目なものを、

「大丈夫だよ、私がお前の神だもの」

と来たから、その神にぶつかれば、そこで悔い改めひっくりかえって、ここに「べし、べからず」の世界を乗り越えるところの、ある一つのエネルギーが出てくる。即ち、神様が信頼するところの神の意志、神の欲するという神の「意志」(Wollen)が、我が意志となって入ってくる。

即ち、人間がなし得る本当のことは、この「欲すること」なんです。

「私はそれは嫌だ、私はそれは好きだ」

と言うでしょ。「好きだ」というのは、欲することです。事実、人間は一日の中にどのくらい欲するところに従って動いているかということを見てください。事実ね、ごまかさないで。欲するところに従っている有様を。

「どうもこの学課はいやだから、こっちの方を勉強しよう」

なんて言っているうちに、嫌な課目は勉強しないで、だんだん駄目になってしまう。みんな欲するところに従って動いている。なーんでもですよ。その「欲する」という「欲する」が、「自己を欲する」のでなくて、「神様の欲する」がこの私の中に欲するとなって、切り換わっていく。切り換え。即ち、福音の世界は、神の欲する神の意欲というものが、キリストを通して私たちの中へ入ってくるときに初めて、律法に対して自由である。

●霊のリバイバル

自由というのは、そのような実は「欲する」、欲して歩いている世界です。「神の欲する」世界が即ちわがものになった時に、その人の魂は「自由」なんです。そうでなくて、「我が欲する」ところに従って動いている中は、いろんなものにとらわれてしまっていて、それを自由だと思ったら、どっこい大不自由になってしまう。いろんなふうに左右されて、もうガタガタですよ。ところが、どんな嵐が来ても、どんな環境がきても、この「神の欲する」の世界に入っていったらば、

「我れ一切の秘訣を得たり」

とパウロが言ったではないですか。あそこへ行くんです。

「あのパウロ先生は偉いから」

なんて、そうじゃない。皆さん一人ひとりがそれになるんです。キリストはそれ以下のものでない。私たちは躓いたり、転んだり、滑ったり、倒れたり、惨憺たるものです。けれどもしかし、その惨憺たることの故に、自分を鞭うつことはない。その奥にキリストを入れたら、知らない間にその惨憺さが次第に神の栄光体と変えられていく。この一天張りの生き方をいかなくては。「神の欲する」において生きることが自由である。「神の慾」において動く。神の慾は神の栄光の現われるところです。なにか

「自由とは何ぞや？」

と論議しているのではないですよ、皆さん。皆さんの中に今それが来ていなければ、来つつあるのでなければ、私は手放しにするわけにはいかない。そうでしょ。だから、

「汝はこれこれである」

といって、エホバが信頼したら、

「誠にそうでございます！」

と言えるんです。それは傲慢でも何でもない。

「貴神（あなた）を受けとってみたら、キリストにおいて貴神を受けとってみたら、本当にそうです！　相変わらず私は、もし自分をみたらダメなんですけれども」

と。しかし、

「キリストに在って。キリストの中に。我がうちにキリスト在り」

という現実においては、それは本当にそうです。それはどこからその現実が来るか。御霊から来る。自分の信仰なんてものではない。ですから、この聖霊の事態が本ものとなって来ることを、本当の「リバイバル」という。本当の生命、このリバイバルが起こるまではダメなんです、霊のリバイバルが。クリスチャンであっても、パウロの言う霊のリバイバルが来なければダメなんです。

本当の人間の自由はキリスト者の自由と一つなんです。ドイツ語の“Freiheit（フライハイト自由）”の“frei（フライ）”という字は元は“fria（フリア）”という字であって、これは“lieben（リーベン）”「愛する」という字と同じなんです。

奴隷状態から解放されて、自由にお互いに愛する世界をこの“fria”“frei”「自由」だという。素晴らしい。マルチン・ルターもこのあとの方で結局、自由が最後のところには愛に展開するように論が自然にいく。自由と愛とが一つである。ドイツ語の言葉の成り立ちから言ってもそうです。互いに愛する世界が本当に自由である。解き放たれた世界であるという、これが語源的にそうなんです。それはドイツ語のことですけれども。

●己れの義

「神の欲する」が「私たちの欲する」となるという、この私たちが動くことが――

「我が思うところ則（のり）を越えず」

どころではない――我が意（おも）うところ、即ち則（のり）を満たしていったのがキリストですから。この則を満たして、いわゆるモーセの十誡よりかもっと奥の世界を彼は満たしていった。山上の垂訓を見ればわかる。キリストの在り方をこの福音書でよく見てください。

「私は何も言えない、何も出来ない」

「何ぞ我を善きと言うか」

と、みんな自分を否定して、

「我が意（こころ）ではない、あなたの聖意（みこころ）である」

と。人間の弱さを斯く彼は身に受けて受肉しておられた。それが本当に霊がここにおいて肉を征服した。即ち「肉」というのは自己の慾です。自己の欲するところは、それがどんなに崇高なことで、立派そうに見えても駄目なんです、自己を立てている限り。偉大な神学の論文を書いて、大いにそれは神学博士だなんて言ったって、自己なら駄目なんです。バルト先生は、

「バルト崇拝なんてことをしてもらってはまっぴら御免だ」

と言っている。キリストだけです。そういった意味においてこの肉というものがすっかり否定されて、

「神様、あなたの霊の意志であります」

と。この霊的な神の意志に対して、

「神は霊であるから、誠に霊をもって拝せよ」

とある。キリストのバプテスマは、ヨルダンの河で洗礼のヨハネからバプテスマを受けた時に、神の霊が完全に彼の中に新しく――勿論、彼は始めから霊の方ですけれども――特に新しくそこにキリストが神の霊を受けられた。これは事実そうです。それだから、荒野でサタンと一騎討ちが出来て、サタンをやっつけた。本当の伝道が始まった。この決定的なことをすませないで、いい加減な気持で、

「私は神の子だから伝道しよう」

なんてやったらば、神の子キリストといえども危ない。霊を深く受け、そして、サタンをやっつけてから伝道する。

パウロはこの霊の事態に抵抗していた。パウロは自分の立場が、始めは「肉」といったって、パウロの肉は立派な肉ですよ。立派なんです、彼は。「己れの義」というやつです。己れの義というやつでもって、彼は律法を満たしていると思っていた。立派なんですよ、正直。立派な人です。人格者です。宗教的な立派なチャンピオンなんです。その事態がインチキでない、事実、本ものです。けれども、全体が「私」なんです。全体が「私」であるから、パウロはこれを塵芥（ちりあくた）の如く捨てた。これをパウロは自ら「肉」と称している。この「己れの義」というやつでキリストに向かったところが――これは十字架じゃない、復活の生命だ――復活のキリストに出っくわして、この義が砕かれてしまった。

「なんぞ我を迫害するか。刺ある鞭をけるは難し。お前はいくら蹴ってもダメだよ」

と。己れの義が完全に審判（さば）かれて、彼はアラビヤで深く祈り冥想した。そうしたらば、アラビヤにおいて彼は十字架をきっとハッキリつかまえたんです。復活のキリストに出っくわされて、

「ああ！　キリストの十字架が何であったか」

がハッキリわかった。

「かくも私は罪びとの首（かしら）であった。私はキリストを十字架につけた一人である」

と。そのパウロは、その十字架につけたその十字架によって逆に、自分の義が十字架につけられた。自分の義は、パウロにとっては、最も大きな罪なんです。即ち、自己の意志を肯定している。一番立派な自己の意志を肯定しているのが罪。

意志的な罪、この“Wollen”〔意志〕ですね、この意志的な罪が最も深い罪であることは、

ダンテの『神曲』を見てもわかる。感性的な罪、感情的な罪はまだ弱い、罪が軽い。けれども、叛逆の意志的な罪は一番重い。こいつがダンテの地獄にも書いてある。

そいつをすっかり彼はこの十字架につけられたことを発見した。

「我れキリストと偕に十字架につけられたり」

我という、自我欲というやつ、自我欲の我というやつが、それがどんなに立派な――いわゆる報酬やなんかを求めているんじゃない――パウロは立派なんです。立派だけれどもそいつがいけない。だから、パウロが一番素晴らしいサンプルなんです。

●一切の魂の問題を十字架にかけた

人々が一番躓きやすいサンプルです。道徳的に立派な人が実は罪びとなんです、キリストの光に照らして。即ち、自分で立っていると思って、

「俯仰天地に愧じず」〔かえりみて、自分の心や行動に少しもはじるところがない〕

なんて思っている。「俯仰天地に愧じず」なんていうものは、キリストの神の光に照らして見たら、まっ黒だったという。それが即ち、「俯仰天地に愧じず」といって自分を義しいとしている。ヨブもそうですよ。

「私は何を、悪いことをしましたか。どうして、神様、こんなことをなさるのですか」

と。それ自体においては、ヨブもパウロも間違いではないんですよ、それ事態の事柄としては。けれども、ヨブもパウロも全体において大きな間違いをしている。即ち、この義は結構なんです。神様、キリストはよく知っている。

「ああ、パウロ、立派だよ、お前は。よくやっているよ、その熱心は結構だ。けれども、その熱心は神をそっちのけにしている熱心じゃないか、それはいかん。神様の生命を受け、神の熱心に切り換えなくては。人間の熱心ではダメだ、人間の私の信仰ではダメだ、キリストの信が来なければいかんよ」

と。それが今のキリスト教界において、いや無教会においても皆そうなんです、下手すると。

このキリストの信というのは、ただ「十字架」と観念で言っているのでない。本当に私はこの十字架にすっかりつけられてしまった。キリストは私を十字架において既に私の慾というものを、我を主張する如何なるものも全部、キリストは例外なしにここへ付けてしまった、十字架に。

「未だ私は少し傲慢です」

なんて、何を言っているか。だから、キリストは十字架についたんです。

「まだ私は、何々です」

と、何を持って来たってダメですよ。全部キリストはあなた方の一切のそういった魂の問題を十字架にかけてしまった。考えてはダメですよ、考えては。全部、ここ〔十字架〕にかかっている。だから、イエスはこの十字架において、「我」というものを立てる――それが

どんなに小さなことから大きな偉そうなことに見えることまで――全部これを罪として十字架にかけてしまっているのが、キリストの十字架です。贖罪（あがない）とったから、

「エホバのみ霊、われに臨めり、貧しきものに福音を、解き放ちを……」

といって、第三イザヤがキリストの福音を預言している。あそこを引っぱって来て、キリストはあのルカ伝4章でもって、カペナウムかどこかの街道でお話をされたではないですか。即ち、あのイザヤ書61章をキリストはハタとつかまえてしまった、自分の中に。全イザヤ書がキリストの中に、全旧約がキリストの中に生きてしまった。イエスはこれを全部受けとってしまった。だから、

「聖書は我につきて証（あかし）するものなり」

旧約聖書は我について証しするものなりと言われた。

そういうようにして、私たちを解き放した。さぁ、解き放ったならば、そこに一体、実質は何が来るのか。言うまでもなく、キリストの生命、永遠の生命です。

「我が与えんとする永遠の生命」

とはヨハネが言っている。また、マルコ、ルカが「天国」「神の国」といい、それが即ちイエス・キリストを中心とするところの天国です。永遠の生命です。それは光と言ってもいい。生命と言ってもいい。愛と言ってもいい。

●日本の敗戦

これが即ち、天界のキリストがそこにおいて私たちに降（くだ）ってくるとは、御霊のキリストの他、なにものにてあるか。み霊のキリストが来なければ、自由なんてことは観念に過ぎない。パウロがここで「御霊、御霊」と言わざるを得ないのは、このことです。そしてさっき5節で読んだ、

「我らは御霊により、信仰によって」

言い換えれば、

「御霊を本当に受けとったことによって」

即ち、十字架という恩寵を事実受けとったらば、解放されたでしょ、皆さん！　そうしたら、その空白に、解放されたところに直ちに充満してくるところのもの、窓を開けたら直ちに外界から入ってくるところの新鮮な空気というもの、これはさっき言った「気」、「霊気」でありまして、「キリストの気」です。

即ち、自分という殻（から）を必ずとり去る。

「私は、私は。我が意志、我が意志」

といっている大きな殻（から）です。この自己の殻、社会の殻、国際関係における殻、全世界の殻、この殻を一角からキリストは破りかかって来た。これ十字架です。十字架の力がこの殻を、人間の側からはどうしても破ることの出来ない殻を――日本人が戦争の前には、思想の自

由とか何とか言ったってダメなんです、いろんな権勢でもって――その日本人の殻をとう神様は非常手段でもって、アメリカやソ連を通して破ってしまった。これを引っくり返して破った。戦争に負けたといいますが、ただ戦争に負けたのではない。神様が殻を破ってくださったんです。

「お前たちダメだね、ひとつ破ってやろう。そうしたらそこから、今度は私が何故お前たちを敗戦させたか、これを受けとれ」

と。「一億総懺悔」なんていったって、ひとつも懺悔していませんよ。本当に今度はキリストを迎えたらば――天皇陛下が神様でないとなって、天照大神（あまてらすおおみかみ）がどこかへ行ったならば――キリストを迎えたらば、本当の神様を迎えたらば、もう敗戦後10何年か経っているこの日本は、もっともっと西ドイツに負けない日本になっているはずだが、ああ……、慨嘆するです。全くいろいろの別な殻が出来たりして、どうにもしようがない。がんじがらめです。

皆さん、本当にこの十字架を受けとりましたか？　私たちをかくまで、がんじがらめから解放してくださった、そのキリストの事態が愛でなくて何でありましょうか。その愛は、いうまでもなく永遠の生命として――キリスト自身が永遠の生命をもって生きていた。その永遠の生命の質は神様の聖意が動いている世界――神の愛が、愛の聖意が動いている世界であります。

●もう天国は私たちの中にある

この自由が、直ちにその内容としては、神の愛――十字架・復活という事態は即ちキリストにおける神の愛、キリストの愛――自由と愛とは、もう解き放たれたら、これは一つですよ。自由の内容は愛。愛でないものは自由でない。もし、愛でないものを、神の愛でないものを、キリストの愛でないものを、自由というならば、その自由は直ちに私された自由になります。これはとんでもない別な自由になる。せっかく頂いた自由が私されているから。

「信仰のみ、信仰のみ」

と言って、信仰が観念化されたらば、また、

「私はもう自由なんだ」

と言って、自由だから勝手なことをしたら、その自由はどっこい、とんでもない信仰です。ですから、

「御霊により、信仰によって、義の希望を待てば」

この場合の「義の希望」というのは、どういうことですか。この愛の生命が、神の意志が、その人を通して我が欲するところとなって、もう嬉しくてしょうがない。

皆さん、救われて喜びが湧かないようなクリスチャンではダメです。「喜び」というのは「欲するところ」と一つです。嬉しいというのは、自分の本当に思うところが成っていくのが嬉しいんでしょ。その「自分が思う」自分がいわゆる自分でなくて、キリストの所有（もの）で

はないですか。そうしたらば、こういったものが本当の喜びである。その自由の内容が、生命が即ち愛でしょうが。そのような事態、神の聖意が欲するところとなって進んでいく。その聖意というのが救ってやまない愛の意志でしょ。救ってやまないところの愛の意志。そのようにして、神の聖意を受けとって、神の愛の意志が立っていく世界。これを義という。

註解書に、義をよく「正義」と一緒に考えている。困るです、正義と一緒では。ブルンナーさんの“Gerechtigkeit（ゲレヒテッィヒカイト）”というのも本当は「正義」ではない。「義」なんです。日本語としては「義」といった方がいい。正義とごっちゃになるから。

「義とは神の意志の立つことなり」

と、私はハッキリ言います。義とは神の意志の立つことです。いろいろな徳目の一つではない。神の意志が立って在るキリストの全存在が即ち義なんです。

福音書は何を示しているか。キリストの義を示している。福音書は何を示しているか。キリストの愛を示している。義と愛が全く一つ。義愛一如です。こういう気合がですよ、

「さぁ、どうだろうか、本当だろうか？」

と議論したり、思索しているうちはこの世界がわからない。いいですね。

この義は、私たちには実は全くないですよ。救いは始まったんです。キリストの義は――「原理的には」とよく書いてあるが原理的ではない――事実ですよ。私たちにキリストの義は来たんです。来たけれども、それが本当に罪の事態を完全に征服するまでは時がかかる。地上ではそれは終らない。だから、「義の希望」と言ったでしょ。パウロがここに言ったこの「義の希望」の義は、非常に深い強い意味です。即ち、キリストの像（すがた）が完全に我に化する事態をこの場合、「義」と言ったのです。

「御霊により、信仰によりて、義の希望を待っている」

と。本当に私たちがキリストの栄光体とされる、その義を望んで待っていることになる。義は既に来ている。そうして、その義は全うされていく。私たちの中にこの霊のキリストを受けとって、私たちの中に至聖所が開かれた。ヘブル書の通り。

そうしたならば、私たちの中にはもう天国が来て、終末の世界は私たちの中にあるんですよ、皆さん。けれども、今まだそれは全うされていない。たくさんの罪の事態にからみつけられている。いろんなかさぶたが私たちの、自分にもあるし、周囲にもある。けれども、そんなことでもって決してこの霊核は、この天国体は滅びない。どんなにマイナスが、マイナスの何乗がその周囲をとりまいていても、このたった一つ、キリストという芥種の一つは絶対に原始力なんです。これが勝っていく。

ですから、これが本当に全部を占領する時を待っている。その待つことは、私が何かをして、それに加えていくのだったら、もう絶望です。けれども、これを受けとれば受けとるほど、それは無限に来るんですから。これが上昇カーブでもって展開していく。祈りの世界において、祈りと実存とがもう離すことが出来ないような世界で、これが展開していく。これ

を信仰というんです。一粒の芥種が、霊核が展開していくんですから、義の種は義の全き、全義となる。この全義の時を待っている。この一粒の義が全義となる時を待っている。必ず成るから、その待ち望み自身は、力ある待ち希望（のぞみ）、力ある実存となる。それが観念信仰だったら力は来ない。始めは大いに力（りき）んでいるけど、下降カーブで落っこちてしまう。私たちは何にもありませんよ、上から来るカーブに乗っかるから、上昇していく。カーブが反対だ、この霊核を受けるから。この事態を御霊という。

●自由即愛

なぜ、かのジョン・ウェスレーが、

「自分は今まで信仰だと思っていたけれども、あの時、本当に御霊を受けたらば、自分は今までのは違っていた」

と。彼は自分が低かったとは言わないで、「違っていた」と言う。これは使徒たちのとは違っていたと。

「本当は使徒たちのはここ〔御霊の生命〕だった」

と言って、彼は展開したから、あの全イングランドを、彼がもう如何なる人も知らない位に地図に詳しくなるまでに、イギリスを伝道して回った。即ちこのキリストの生命が彼をして全イギリスを、パウロが全地中海を回ったように、廻らしめたのです。ウェスレーの信仰ではない。キリストのこの御霊の生命です。その点では、私は、マルチン・ルターよりかウェスレーの方がある意味では上だと思う。

そういうのが即ち、聖霊によって解き放たれた者の自由なんです。解き放たれた自由は、本当に神の意志が発動して、キリストの生命が発動し、キリストの生命と愛とが発動していく世界です。だから、

「クリスチャンは何ものにも依存せず」

という時には、

「キリストにだけ、キリストに在って神にだけ依存して、神の奴隷である」

その時に彼は本当に自由である。その自由は本当に自分が捨てられた自由、神の意志が発動していくんですから、自分なんてものは無い。だから、本当にキリストの愛が、神の愛がそこから展開していくから、万人の僕となるという。喜んで僕となっていく。即ち、喜んで仕えていく。「服従の仕え」ではない。仕えざるを得ない。キリストは、

「我は仕えんために来た」

と言われた。パウロはキリストの僕となったら、本当に神の子であるということと、キリストの僕であるということが一つです。だから、有名な命題が書いてあるでしょ。『クリスチャンの自由』の一番最初に、

「クリスチャンは何者にも依存せず、自主のものである。

また、クリスチャンは全てのものに依存する奴隷のものである」この二つの命題が決して矛盾しない。矛盾しないどころではない。これが本当に組み合わされなければ、真理ではない。それが自由即愛なんです。自由即愛。神の自由は人を救済してやまない自由ですから、その自由を戴いたのはキリストなんですから。そのキリストを頂けば、そうなっていくんです。６節の、

「[6]**キリスト・イエスに在りては、割礼を受くるも割礼を受けぬも益なく、**そんなものは問題ではない。

ただ愛に由りてはたらく信仰のみ益あり」

「愛に由りてはたらく信仰のみ」というのは、

「信仰は愛によって働くものなんだよ」

ということ。文法的には、パウロの言う「愛によって働く信仰」というのは、「信仰」という言葉を「愛によって働く」が限定しているけれども、実はこれは全称判断であって、特殊判断でない。即ち、

「信仰というものは愛によって働くものだよ」

というんです。

「愛によって働く信仰のみ益あり」

でいい。

「信仰は何かというと、それは愛によって働くもんだよ」

ということです。パウロはそういう意味でここは書かなかったでしょう。信仰といってもちょっと困った信仰もあるから。愛によって働かないような信仰もあるから、

「愛によって働く信仰だけが益がある」

と言ったまでで、実は本当の信仰というのは、愛によって働かざるを得ない。信愛一如です。ここのところはむしろ、

「ただ信愛のみ益あり」

です。「信仰」なんて言わなくていい。私たちは「信仰」という言葉の代りに「信愛」と使った方がいいかも知れない。仰いでばっかりいたって仕様がないから。

信愛のみ。即ち、化体している事態、受肉です。キリストが受肉している事態は現実ですから、その「信愛のみ益あり」です。「愛信のみ益あり」と言ったっていい。全称判断で、特殊判断ではない。

そういう部分的判断でなくて、全体をいう、信即愛である。愛ならざる信なんてものはありはしない。そういう信愛というキリストを受けとったならば、さっきも申し上げた通り、こういうものが来たら、必ずそれはキリストの像（すがた）に化し、神の国になる終末的実存というものは、信愛実存というものは当然、希望が来るんです。

●素晴らしい天則の世界

だから、本当は「信・望・愛」ではない。「信・愛・望」なんです。信愛を受けると、望が当然と来る。希望というものは事実与えられているから希望なので、与えられてないものは望みにならないですよ、そんなものは空想です。そんなものは願望です。事実ここに与えられているから本当の希望で、これは裏切りのない希望、即ち神の側からいえば、約束なんです。新約というのは、

「再び神・キリストは来り、この地上に天国が来る」

という約束は、私たちの側からいえば、約束されたものを受けとることが即ち希望で、約束の手形はどこにあるか。聖霊の、この御霊の、信愛の実体が、霊核としてここに来ている。これが保証です。天国はここに保証されている。これを持たないで、クリスチャンなんて、何が言えるか。これを持たないでどうして伝道が出来るか。

だから、グラハムやなんかが来て、牧師さんたちに、

「聖霊を受けよ！」

なんて、牧師さんたちが言われるんですよ。

この希望は絶対に恥を来らせない。この希望は与えられているのであって、人間が願望するのではない。与えられたものですから、私の中に与えられているこの希望を、何がこれをくつがえすことが出来るか。20世紀が引っくり返ったって大丈夫。神の国は引っくり返らない。私たちがみんな死んでも、石は叫ぶ。アブラハムの子を石からもキリストは起こすのであります。

そういう使徒的な信を私は戦っていきます。無教会に何と言われたって、どんなに誤解されたって私は行きます。このパウロ、キリスト、ヨハネの事態に対して拒むことは、私には絶対に出来ない。立場でも主義でも主張でもない。ただ、深くこの中に入って行って、かく告白せしめられるだけであります。

パウロが説明している言葉が未だまだるっこくて仕様がない位に、皆さん、なってくるでしょ。そういうような具合で、パウロは、

「御霊によって歩め」

と言ったって、

「そうだね、御霊によって歩もうじゃないか」

と喜びをもって勧めている言葉に響いてこなければウソですよ。

「パウロは、歩めと言う。困ったな、歩めるかなぁ？」

なんてじゃなくて、

「大丈夫、歩めますよ。なぜ、歩めなんて仰るんですか。十字架が私たちを解放してくださったということを未だ受けとらないんですか」

と言いたい。

「あの聖霊のことを言っている連中は、ちょっと十字架がおかしい」なんて、冗談言っちゃいかん。この十字架が本ものでなくて、どうして聖霊が本ものであるか。かえって逆に、「十字架、十字架」と言っている連中が本当に聖霊を受けてないからなるじゃないですか。他人（ひと）のことは何も言うことはない。私たち自身がいよいよまだまだ限りなくこの使徒たちの世界に入って行くことです。――私たちは言いたくないですよ、そんなことは――「あの十字架は……」ということに

質ですぞ、皆さん。この質。一年に一人の人を本当に祈って、その人のために本当に心をそそいで伝道をすることは、キリストを与える愛じゃないですか。一人の人が本当に隣の一人の人を真にキリストの愛の世界に入れたならば、この人はどんな嵐が吹いても、大丈夫な、そういったダイヤモンド的なクリスチャンを、あなた方は一人ずつ作ることを念願として歩いてください。念願とならざるを得ないじゃないですか、ここへ来たら。そうしたならば、今から10年あとにどういうことになるか。私は数を言っているのじゃないけど。それだけの意欲と念願をもって私たちが歩かなかったら、私たちの実存は怠慢であります。

これはキリストの生命というもの。そのような神様の、キリストの意欲が我々の意欲となって、本当に自分の楽しみ、嬉しみとなる。嬉しくなっているその世界が、実は最も素晴らしい法則の世界なんです。これは天則（てんそく）の世界、天の法則の世界です。モーセの律法、キリストの山上の福音の、この法則の世界が、天則が本当の自由において、本当の天則がそこにむしろ創造されて受けとられて、神様の創造の天則を受けとりながら行く。それは本当の意味における、天才的な世界です。いわゆる天才ではない。天才以上の世界です。そういった天の法則にのっとっていて、凡そ人間の小さな小学、自分の意志とか、そんなことを言っているのと凡そ違う。この天的意欲こそ、天的法則こそ、真の自由である。

自由とは何ぞや。ああ、私たちはもう「自由とは何ぞや」ではない。その自由の体となって自らこれを証していくことが、最も深い正しい意味における「自由とは何ぞや」の説明であります。ガラテヤ書5章はグーッと化体（かたい）してきた。聖書を読んで、それが本当に化体してこなくては。

「ああ、私の血であり肉であるぞ、私の生命（いのち）のつらなりであるぞ」と。文字が生命のつらなりとなって来なければいけません。

ええ、何かいろいろ引用しようと思っているうちに、みんなどこかへすっとんでいっちゃいましたが、仕方がない。そういうわけです。このへんにしておきます。終ります。